

2019年度 独創的研究助成費 実績報告書

2020年 3月 23日

報告者	学科名	造形デザイン学科	職名	教授	氏名	助川 たかね
研究課題	バルクリシュナ・ドーシ：「未来を変える」住宅デザインの思想と手法					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	助川たかね	造形デザイン・教授	都市計画デザイン	全体統括・実施	
	分担者					
研究実績の概要	<p>研究の学術的背景</p> <p>一億総中流と言われた日本も自由経済主義の加速に伴い格差社会へと移行、厚生労働省による所得配分調査では所得格差は過去最大レベルに達している。さらに相次ぐ自然災害の猛威は仮設住宅や災害公営住宅での先の見えない暮らしを強いており、誰もが住宅弱者になり得る状況にある。住宅支援を対象とする研究や政策は多領域にわたり、産官学をあげて様々な対策が実施されてきた。しかし支援を受けた後に長く続く未来を変えられない限り個人にも社会にも限界が来る。「先の見えない」毎日という負の連鎖から抜け出せる支援が必要とされている。</p> <p>本調査研究の目的</p> <p>2018年に建築界のノーベル賞と称されるプリツカー賞を受賞したインド人建築家バルクリシュナ・ドーシは、貧困層の未来を変えるための設計思想を貫いている建築家であり、インドの建築教育の礎を築いた教育・研究者でもある。本研究では、西欧での活動で身に着けたモダニズムをデザイン・機能面で発揮しながら、長年にわたり「社会に対する責任感」をもって公共サービス、教育文化機関、貧困層のための住宅を創造し続けているドーシの設計思想と手法を検証し、我が国の都市計画、公共建築、住宅政策への応用を提案することを目的として開始した。</p>					

※ 次ページに続く

<p>研究実績 の概要</p>	<p>調査研究内容</p> <p><u>データ収集・分析</u>：60年余りの活動歴の変遷を整理・検証するために、現存する100件程の建築作品のなかで、各時代の代表作約20件に関するデータを収集・分析した。研究代表者は私費を使って渡印し、建物自体がドーシの思想を実現している彼の事務所の所在地であるアーメダバードでの現地調査を実施している。</p> <p><u>同種の事例調査</u>：住むためだけでなく、住み手が「先の見える」毎日を送り「未来を変えられる」住居というデザイン思想を実現した彼の設計手法を分析する過程で、同じ目的のもとに進められている台湾の公共住宅事業に着目した。公共住宅を住人の未来を変える装置として位置づける思想と手法を我が国で活かす術を模索するなかで、台湾の台北市が10年前から始めた若年層に的を絞った新しい住宅政策の手法には応用の価値があると期待し、国立台湾大学研究者の協力を得て、台北市内での現地調査を実施することにしたのである。</p> <p><u>システムと課題</u>：台湾はインドに比べて文化風習的にも日本に近く、日本での応用可能性が見込まれやすい。貧困層・被災者向けの初期住宅を提案するにあたり、若者の持つ可能性をコミュニティに還元することで経済的負担を軽減するシステムの根底にはドーシと同じ思想があるが、同時に課題も浮き彫りにした。この調査を通して、より実現性の高い提案のための知見が得られたと言える。</p> <p>期待される成果</p> <p>衣食住のセーフティネットのうち、費用が高く継続支援することが難しいのは住への支援である。「デザインとは、シェルターを住宅に、住宅をコミュニティに、都市を機会が集まる磁石に転換するものである」という思想に基づくドーシのデザインを分析し再構築することは、貧困や災害のために長期間シェルターに暮らす多くの日本人のために「先の見える毎日を送り、未来を変えられるための」住宅支援という発想の転換を都市計画や住宅政策にもたらす契機となるものと確信した。</p>
<p>成果資料目録</p>	<p>OPU フォーラムポスター発表 2020年5月29日（予定） Life Celebrates when Lifestyle and Architecture Fuse 「未来を変える」住宅デザインの思想と手法：台北社会住宅の挑戦</p>